

千切れたチェーンをなんとかつなげない物かと、一人あれこれ試していたセオドアが諦めを付けて溜息を吐いた。どのみち、チェーンだけ繋がったところで台座はヒビが入り、埋め込まれた魔法石も幾つか壊れている。普通ならとくに諦めて捨てるどころだが。

もう一度それを掲げて、再び溜息を吐いた……ところでそれが、後からひよいと誰かの手に誘拐された。

「あ……」

一瞬驚いた。が、それもほんの一時。それはもう幾度も助けられた浅黒い肌の色だったから。セオドアは見上げるようにして頭上の大男を確認した。

「お…ゴルベーンさん。」

やはりそこにいたのは伯父だった。伯父は黙って壊れたサークレットを見つめていた。

「…良い品だな。」

「そ、そうですね？　ありがとうございます。」

出会った当初は威圧感のある立ち振る舞いも、凄みのある声にも圧倒され恐ろしさすら感じたが、本当は印象と

「…お前の為だけに作られた品だな。お前の力に馴染むよう、かなりの時を掛けて設計したのだろう。ミシディア製だな。」

伯父は労るようにしてそれを撫でて、そう言った。

「そ、そうなんですか？　そこまでは僕聞いてなくて。」

「造形の意匠がバロンのものではない。成熟したたミシディアの魔法様式だ。そこに長い時間を掛けて精練された魔法石が埋め込まれている。お前が長期間身に着けていた事により、それがより強い形で強化されているな。だからこそあの致命的な一撃をあ程度の衝撃に軽減出来たのだろう。」

珍しく饒舌な伯父にちよつとだけセオドアはあつけにとられた。それでも、カイン曰くミシディアの人以上に魔法や魔法具に詳しいらしいその人に、自分のお気に入りを買贖されればそれは当然、嬉しかった。

と、同時にそれを失った寂しさも込み上げる。

「そっか…僕を守ってくれたんですね。」

「……そっくだな。」

違つて随分と優しい人なのだという事が今は理解出来ている。カインさんのさり気ない優しさを三倍判り辛くしたような人なのだと、そう解釈もしている。あの父がこの人の前では子供のように甘える感情を見せたり、何より尊敬しているカインさんが掛け値無し of 信頼を見せたりしている事も、セオドアにとつては物凄く大きい。最近じゃ、父よりもよっぽど父親っぽくてちよつとカッコいいか思ったりも密かにしている。言えないけど。

その伯父と二人で話が出来る思いもかけない機会に、セオドアは少し浮き足立った。

「十歳の誕生日に父さんと母さんからもらったんです。デザインが凄く気に入っていて…なんていうか体に馴染むっていうか。チェーンを調節してもらったりして、ずっと身に着けていたんですけど…。無くなると、ちよつと額が寂しいですね。」

そう笑つて、セオドアはすつきりとしてしまった額を掻いた。目を細めてそれを見ていた伯父が厚みのある声で、しかしどこか優しげに口を開いた。

僅かな沈黙が流れた。

「借りるぞ。」

「え？」

「明日には返す。」

それだけ告げて、伯父は静かに去つて行つてしまった。

ぽかん、として静かな嵐のように来て去つた伯父の背中を見送つて呆然としていたら、入れ違うようにして今度は師…カインが今さっき伯父の去つた扉を開けて入ってきた。「…なにをばさつとしてるんだセオドア。さっきのが響いてるか？」

やや冷たいような物言いだ、過度に労られる事を嫌う自分の性を十分理解して師はそう言ってくれているのだということこそセオドアは良く知っている。